

小野ゼミは宗教か？

第5期 OB 千葉 貴宏

小野ゼミは宗教か？——ぱっと見たところ、まったく興味深くない論題です。なぜなら、小野ゼミはゼミであって、いち教育機関であるからです。2004年、著者が小野晃典研究会の門戸を叩こうとしたとき、小野ゼミは宗教的か？という論題が友人との話題の中で俎上に載ることはありませんでした。しかし、今、小野ゼミは、数多くの商学部の学部2年生によって、「週8ゼミ」を超え、「宗教」とまで揶揄されると聞きます。小野先生の大きな求心力とゼミ生の強いまとまりが、ある人にとっては学究的であり、別のある人にとっては、宗教的であるというのです。この、小野ゼミのいわば宗教性について、考えてみたいと思います。(OB会誌上でそんなこと考えるな、というツッコミはナシにして。)

人は、真実を希求する活動に従事する一方で、真実を嫌う変わった生き物です。そして、真実に近づくに際して重要であるのが論理であるとすれば、人は、論理を希求する活動に従事する一方で、論理を嫌う変わった生き物である、とも言えます。論理への嫌悪が生じるのは、あらゆる論理が、批判や反駁という行為の繰り返しによって発展し、それに対して、誰しものが、批判や反駁に晒されるのを怖れたり嫌ったりするためであると考えられます。批判や反駁を嫌う限りにおいて、彼ないし彼女は、批判的議論の難しさや反駁による心理的ダメージを、議論が不可能である(と感じるほどに話し相手の頭がカタい)ことと誤解し、それゆえ、高水準の論理性は、盲目的——本稿の言葉では、宗教的——な世迷言を導くと誤解されます。つまり、真実に近づくために論理的であることは、批判や反駁を嫌う大多数の人にとっては、いつでも、宗教的であることと誤解——彼らにとっては、理解——されるリスクを持っているのです。

蓋し、教育とは、宗教的であることと切っても切り離せない関係にあります。なぜなら、宗教にとっての、救いを施す教祖の求心力と救いを求める信者の(教祖の求心力の下での)まとまりが必要であることは、教育にとっての、教育者の強い理念と被教育者の強い意欲が必要であることと非常に似ているからです。無論、ある集団における知的営みが科学的である限りにおいて、それは宗教「的」であるのみに留まるはずです。ピタゴラス教団の科学的成果は、「無理数はこの世界に存在しない」というピタゴラスの宗教的な信念によっては、その価値を損なわれることは決してないでしょう。したがって、小野ゼミは、宗教ではないけれども宗教的ではあるし、それはある程度必要なことである、というのが、私の結論です。

気持ち悪く長々と述べてきましたが、論理性を守り高めるといふ努力によって培われてきた小野ゼミのいわば宗教性を悪しと考える人と、良しと考える人の間の差異が生じる原因については述べてきませんでした(小野ゼミを宗教的であると考えた人とそうではないと考える人の間の差異については論じたつもりです)。なぜなら、私には、その原因がわからないからです。ただひとつその点について申し上げられることがあるとすれば、教育機関に対するにしろ宗教機関に対するにしろ、所属する人が自身の判断規準——「規矩」という言葉で表現可能かと思えます——を持ちさえすれば、所属集団の特性についてあれこれと思い悩む必要はなくなるのではなかろうか、ということです。少なくとも私の規矩の下では、小野ゼミの宗教性が、悪しと判断されたことはありませんでした。